

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

戦国時代の権力者は、軍事要塞として城を築き、その近くに商人や職人たちを集めて町をつくった。織田信長の楽市楽座はそのアテンケイで、都市を充実した賑わいの場にすることに成功した。権力者が町をつくり住民を住まわせる城下町が日本の都市の主流になる。明治になってからも、都市は「お上」がつくり、また「企業」がその城下町をつくってきた。

西欧では中世から、商工業者を中心にした市民が、権力者である領主から自立して、自治都市あるいは自由都市という立場を勝ち取って町をつくるが多かったが、日本にはその例はほとんどない。だから受動的な「住民」はいても、主体的に都市をつくらうという「市民」は不在である。つい最近まで、都市や町をつくるのは行政権力や企業権力であり、住民はそこで暮らすだけで、自ら「まち」をつくるという意識は希薄なままであった。

一九一九年に制定された都市計画法では、計画は「内閣にイハカつて主務大臣が決定する」と規定され、都市は国家という「お上」がつくることになっている。自治体はB「国家の決めたことを実施する代官にすぎない。この状態が、戦前ばかりか戦後の最後まで続く。自治体は住民代表の立場ではないから、住民から要望や提案が出て取り上げられない。だから、できるだけ住民の意見を聞かないで、せいぜい説明だけですませたいという気持ちが強かった。

日本は第二次世界大戦の敗戦によって民主主義国家に生まれ変わったはずだ。「地方分権」を言うまでもなく、自治体の自立性は現行憲法でうたわれている。a「固有の風土と歴史のある地域が、全国画一的に各省庁バラバラな施策で振り回されていては、「よい」「まち」はできない。住民から直接公選された首長たちには、法令はなくても自らの判断で地域と市民のための施策を行う動きが出てきた。

一九六〇年代初頭から、先進自治体では、独自の方法で乱開発による崖崩れの防止、学校用地の確保、排水の設備、あるいは工場の公害に対する予防ウソチなどを行い始める。また、民主主義の実践の場としての市民参加のさまざまな試みを始め

た。地域の個性や文化を求める地域ごとの工夫も始まる。都市という複雑で総合的で個性的な計画をするには、国家という画一的な「お上」では無理である。ようやく、自治体は国の出先機関ではなく、市民の側に立って、独自の立場で個性的な地域づくりを自覚するようになった。

一般的な自治体は、事態の変動に鈍感で、相変わらず中央の出先機関の立場に甘んじているものが多かった。直接に生活を脅かされる住民の方が敏感に反応し、さまざまな反対運動がおきる。そのうちいくつかは、自発的な「まちづくり」運動へと発展していった。

一九六〇年代になると市民参加をはっきり打ち出す自治体も現れた。議会や中央官庁からは市民参加へのb「が強かったのだが、国民主権の立場に立つと逆らえない。

ものが言えるとなると、住民からは要望や不満が噴出してくる。また住民は自分たちが主体で責任があるという意識はない。住民参加といっても「お上」にたいする要求、陳情合戦になりやすい。首長も選挙のためには、多くの要望にたいしてバラ撒き式に対応しようとする。だが、矛盾する要求には応えられないし、予算は有限で全部に応じられるわけがない。住民参加が始まって、住民・行政の両者から不満も聞こえる。

アメリカの自治体では、新しい事業やサービスを行うときに、自らの負担を伴うということを示して、その資金を得るために、住民投票にかけて増税することがある。自治体と市民の自立性の現れだ。日本式の要求、陳情合戦は、住民が主体的に責任を負うものではなく、「お上」へお願いして「まち」をつくるという意識から抜けていない。

最近になって、「まち」は住民が共同して生活するものだから、自分たちが協働して責任をもってつくってゆくという意識が生まれてきた。民主主義社会なら当然の原理である。そういう自覚あるものをc「と分けてd「という。「まちづくり」の実践の主体は、こうしたd「であるのが本筋だろう。

(田村明『まちづくりの実践』より)

問1 傍線部ア・イ・ウのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記せ)

問2 傍線部A「自ら「まち」をつくるという意識」とあるが、これをより詳しく述べた内容を含む一文の最初の五字を抜き出せ。(句読点は時数に含まない。以下同じ)

問3 傍線部B「国家の決めたことを実施する代官」とあるが、これとほぼ同じ内容の語句を本文中から十字で抜き出せ。

問4 空欄 a を補う最適なことばを次の中から選べ。(解答はマークシート)

- 1 さもなくば
- 2 このように
- 3 そのうえに
- 4 それなのに
- 5 これによって

問5 空欄 b を補う最適なことばを次の中から選べ。(解答はマークシート)

- 1 支援の声
- 2 否定的な意見
- 3 弾圧の動き
- 4 感情的な反発
- 5 黙認の傾向

問6 空欄 c・d を補う最適な二字のことばを本文中からそれぞれ抜き出せ。

問7 この文章からは「これではおかしい。」の一文が省略されている。これを補う最適な箇所はどこか。その直後の五字を抜き出せ。

問8 この文章の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。(解答はマークシート)

- 1 現代においても、楽市楽座のような成功例を再現すべきである。

2 日本では西欧の自治都市あるいは自由都市のような例はなく、企業が権力者から自立して町をつくってきた。

3 日本の行政上、住民は自治体に希望を伝えても取り上げられないので消極的になった。

4 「まちづくり」が自治体主導で行われない場合に、住民の側からその動きが生まれることがあった。

5 権力者に積極的に要求をおこなって実現してもらったもの、「まちづくり」のひとつのあり方である。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「わたし」は契約の終了により長年住んだ賃貸の部屋を引越そうと考える。知り合いから段ボール箱をもらいうけて、引越し作業にとりかかるため押し入れを開けた。

わたしは手はじめに最前面に積んであるものに手を触れた。それは最近必要であったもので、その多くは本であった。本は雑然としていた。占星術の指南書があるかと思えば、ベストセラーズの女流作家の小説があった。社長の自伝やカメフラシヨールのカタログがあった。いずれも覚えのあるものだった。これはどれも用済みで、二度と手にするかどうか判らないものだった。わたしは冷淡にこれらの本を眺め、引越しをする前に古書店へ売却した方がよいかどうか思案した。引越しの費用の一部を捻出するためにもその方がよいようであった。ということになると、運搬用の箱に入れるわけにはいかない。部屋の片隅に、不要と判定された本だけを、まとめて積み上げて置くことに決めて、それらの新しい本の層を剝しにかかった。そして本は、胸く崩れおちて散乱した。

それがはじまりだった。わたしは本をとりぞいた、とばかり思っていたが、そ

うではなかった。わたしは最前面の本がなくなつてあらたに露出してきたものらの姿を見た。それも多きは紙で出来たものであり、音もまた少くはなかった。しかしそれらは最前面にあつた本とはあきらかに異なる雰囲気をもつてわたしに対してののだつた。それらは一見わたしに対して関係が薄い、という態度を装つていた。わたしもまたそのことをかれら一般に対しては認めざるを得なかつた。かれらは、新鮮なものの持つまばゆさを既に失つていて、全体にややくすみがちな印象を形づくつているといわねばならなかつた。それらがどのような局面でわたしとかがかわりがあつたのかを思い出すことはまだ多分可能であつたけれども、それらのいづれもが強い糸で自分と結ばれていた、という感触はなかつた。

しかし、それで事が終れば幸福だといわねばならない。わたしは数十秒後にはそのことに気づかざるを得なかつた。かれらは一応わたしに対してよそよそしい態度をとつてはいるがそれはしばらく時を隔てていたという理由のせいに過ぎず、だからわたしを無罪釈放してくれる筈もないのだつた。わたしがぐいと惹きつけられるのを意識しながらのがれられないままにみつめてみると、やがて意識の深奥にわたしではない他の者は決して味わわない、と確信出来るような独特の肌ざわりともいふべきものが生まれてくるのだつた。それはたとえば、手垢によつて黒光りをしてる古い家の柱の感触の如きものであつてそのものとわたしとの特定かつ独特のかかわりあいというやや淫靡な要素が介在してはじめて成立しているのだつた。

そのことを意識しはじめると、たとえわたしという車輪のその軸が回転するときに僅かではあるがそれを阻害する粘性の強い液体にまつわりつかれているような気持になるのだつた。わたしはそういう思いを押しえつけるようにして、その壁と化した層から数冊の本を外して、頁を繰つてみた。するとそのあいだから一枚の葉書が出て来て、それがわたし宛てのものであることに気づいた。それはわたしがその内容も発信人も何もおぼえていないようなものであり、事実裏を返してみると、〈先日は結構なものをお送りいただき家内ともども恐縮しております〉といった達筆の文面で、わたしはどうやら何かの礼のために百貨店あたりから贈りものをしたと見えるのだつた。

さらに本を一冊脇へどけると、そこには、盛り場の女性服飾店の紙袋のかたまりがあらわれたのだつた。それを見るなり、わたしはかつて味わつた忌々しい思いが立ちもどつてくるのをおぼえた。その袋のなかにはカーテンの吊環のような金属環に綴られたカードのかたまりがぎつしりとつまつてはいるはずであつた。そのカードの作成、調査に払われたわたしの労力というものは相当なものであつたにもかかわらず、遂にそれは未だにここにこうして在つて埃をかぶつてはいるのだつた。そして今わたしが当時よりもやや質の異なる形で忌々しい、とそれらのことを思うのは、その仕事の内容が、時を経た今、まったく無意味なものになり果てているという事実に気づいたからだつた。これが作成されたばかりの頃には、たしかに商品価値はあつたが、事情によつて換金をあきらめたまま押し入れに放置されているあいだに着実に価値は減少していき、そして遂に零となり果てたのだつた。

わたしはその壁の層に手をつけながら、内心ためらうものがあるのを感じていた。この壁の層を剥してしまえば、その次に姿を現わすものは何か。確実に予測できることもあり、見当のつかぬこともあつた。予測のつくことについては、aとbが伴つていた。予測出来ぬ領域についてはcがあつた。それは零度をかなり下まわつた冬の風の持つ、重量感ある衝撃を予感させるのだつた。わたしは横なぐりになぐりつけられて、そこに倒れてしまふ、と直感した。

ならば止めておけばよい。私は自分が今、箱のなかにものを収納する、という事務的な目的で作業をしていることを忘れて、そんなことを考えはじめていた。すでにわたしは、現在という壁の層によつて封じこめていたc時の緊縛体に手を掛け、剥しはじめってしまったのだつた。止めたいと思つても、わたしの脳のなかの本能的な部分はその命令に屈するわけがなかつた。

何故なら、そこにはわたしを狂喜させないではおかないもの、つまりわたし自身が潜んでいるからだつた。わたしは、他者の肉体に触れたり、肉体が醸し出す配の圈内にいてその支配を体験することに深い関心と執着のある人間であるが、そのときいつも残念に思うことは、他者は充分わたしを自由にしてくれないということであつた。他者が他者である限りそうあるべきであり、それ故に他者であるのだ

が、しかし、人はいつも論理通りに生きることが出来る、というわけにはいかない。わたしは怠惰であるからか全き自由な肉体への関係というものに憧れないではない。わたしの対象となるべき肉体は自分自身に他ならないが、しかし自分で自分の肉体を対象とすることはそもそも不可能なことであっていつも断念しなければならなかった。そのとき当然、dが望まれる。しかし姿見や写真がどれほどの役に立つだろうか。それよりも今迎えた局面でわたしの肉体がやや質を異にする若干の可能性にむかって理性の命令を拒否してまで突進していかうとするのは当然ではないだろうか。すでに過去を緊縛したものはどりのぞかれていた。わたしは時ははらわたに指を入れ、そのなかから内容物を引き出して

(三木卓『転居』より。出題の都合上、本文の一部を改めた)

問9 傍線部ア・イ・ウ・エの漢字の読みをひらがなで記せ。

問10 傍線部A「独特の肌ざわりともいうべきものが生まれてくる」とあるが、この時の「わたし」の心情の説明として最適なものを次の中から選べ。(解答はマークシート)

- 1 時間の経過により成長した自分を省みて嬉しさと自信が入り混じった心情
- 2 時間の経過により過去の自分を客観的に見られるようになって誇らしい心情
- 3 時間の経過により忘れていた自分にふれて驚きと懐かしさが入り混じった心情
- 4 時間の経過により薄汚れた自分を省みて哀しさと情けなさが入り混じった心情
- 5 時間の経過により変わり果てた自分を振り返って驚きといぶかしさが入り混じった心情

問11 傍線部B「忌々しい思い」とあるが、この思いの直接的な理由を述べた箇所を本文中より十字以内で抜き出せ。(句読点は字数に含まない)

問12 空欄 a、b、c を補う最適なことばの組み合わせを次の中から選べ。(解答はマークシート)

- | | | | |
|---|------|------|------|
| 1 | a・期待 | b・不安 | c・苦痛 |
| 2 | a・不安 | b・戦慄 | c・嫌悪 |
| 3 | a・嫌悪 | b・戦慄 | c・期待 |
| 4 | a・苦痛 | b・期待 | c・不安 |
| 5 | a・期待 | b・戦慄 | c・苦痛 |

問13 傍線部C「時の緊縛体」は「わたし」の目にどのように映っているか。もっとも具体的に述べた一文の最初の五字を記せ。

問14 空欄 d を補う最適なことばを次の中から選べ。(解答はマークシート)

- | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | 代理物 | 2 | 媒介物 | 3 | 目標物 |
| 4 | 対象物 | 5 | 人工物 | | |

問15 本文中から「しかしそのようなことが可能だろうか。」の一文が省略されている。これを補う最適な箇所はどこか。その直後の五字を抜き出せ。

問16 この文章の内容に合致するものを次の中から一つ選べ。(解答はマークシート)

- 1 「わたし」は良い想い出のある荷物だけ新居に選ぼうと考えている。
- 2 「わたし」は荷造りを過去の自分と向き合う緊張感が伴う作業と感じている。
- 3 「わたし」は荷造りと過去の自分の回復とどちらを優先しようか迷っている。
- 4 「わたし」は過去のあやまちを思い出し荷造りをやめた気持ちになっている。
- 5 「わたし」は過去の自分を取り戻すために全力で荷造りに取り組もうとしている。

【解答】

〔一〕

問1 ア 典型 イ 諮 ウ 措置

問2 最近になつ

問3 中央の出先機関の立場

問4 4

問5 2

問6 c 住民 d 市民

問7 日本は第一

問8 4

〔二〕

問9 ア ねんしゅつ イ もろ ウ しんおう

問10 3

問11 換金をあきらめた

問12 4

問13 かれらは新

問14 1

問15 すでにわた

問16 2

【解説】

〔一〕

問1 イの「はかゝる」は同訓異字がいくつかあるのでチェックしておきたい。

「諮る」…ある問題について他者の意見を聞く。また、公の機関などで、ある問題について学識経験者による委員会の意見を「答申」として出してもらふ。本文の文脈では、この意が最適である。

「測る」…長さ、面積などをかぞえる。

「量る」…重さ、容積などをかぞえる。

「計る」…時間などをかぞえる。

「図る」…ある動作が実現するよう、計画をたてたり、努力したりする。

「謀る」…他人をだます。

問2 傍線部の主語を考えると、「住民は」とある、つまり傍線部は「住民が自ら自分たちの住む町を、責任を持って運営して行く」という意識」という内容である。また、傍線部末が「意識」で結ばれている。以上を考慮した上で同内容のものを探していくと、最終段落に見つかる。

問3 問2と同系統の設問である。これもまず主語から確認したい。「自治体は」とある。ここでいう自治体とは地方自治体（地方公共団体）であり、行政単位として考えた都道府県市町村のことを指す。また、「代官」とは君主ないし領主の代わりに任地の事務を行う地位・役職のことをいう。以上に加えて直前の部分を考慮すると、傍線部は「自治体はまちづくりに関して、政府が決定した事案を代行して執行する機関にすぎない」という旨の内容であることがわかる。「自治体は」という主語に注目すると、第六段落と同趣旨の記述があることが見つけやすくなる。

問4 空欄の直前では自治体の自立性について触れられ、直後では自治体が全国画一的な（国の）施策に振り回されている旨が述べられている。逆接である。

問5 空欄直後が逆接表現になっていることに注目する。「…強かったのだが、国民主権の立場に立つと逆らえない」という文脈から、空欄が議会や中央官庁が市民参加に逆らうような内容であることがわかる。選択肢としては2, 3, 4にしぼられる。3の「弾圧」（支配者が権力を行使して、反対勢力の活動を抑えつけること）は民主主義国家である日本で起こるとは考えられないし、4の「感情的な反発」も議会や中央官庁で起こるものとしてはふさわしくない。2が妥当である。

問6 指示語の把握が重要な問題。空欄前後は「そういう自覚あるものを」と分けて「d」という」とある。「そういう自覚」とは一行前にある「まち」は住民が共同して生活するものだから、自分たちが協働して責任をもつてつくってゆく」を指す。さらに「ま

ちづくり」の実践の主体は「こうした d であるのが本筋であろう。」とあるから、d に入るのは、自分たちで責任をもって「まちづくり」をしていく主体、すなわち中心となる人々を当てはめればよい。c にはその対となる内容として、責任を持たず「まちづくり」を他者に任せている人々が入ればよい。以上から探すと、第二段落に「受動的な「住民」はいても、主体的に都市をつくらうという「市民」は不在である。」とある。

問7 脱文に「これではおかしい。」とあるのだから、直前には筆者の意見と反する内容があるはずである。なおかつ「おかしい」と断言しているのだから、脱文の直後には問題についての正しい在り方が書かれていると推測できる。第三段落から第四段落の流れが、そういった流れになっており、ここに挿入するのが妥当であろう。

問8 各選択肢を見てみる。1、第一段落の楽市楽座は権力者が町をつくった例として書かれているので、筆者が実践すべきと述べる、市民が責任をもって行う「まちづくり」とは反するので適合しない。2、第二段落に企業が権力から自立して町をつくったという記述がなく、不適。3、第三段落に自治体が住民の声を聞くことに消極的になった旨の記述があるが、住民が消極的になったとの記述は無く不適。4、第五段落に、住民の反対運動が自発的な「まちづくり」運動へつながった、とあり適合する。5、第八段落で住民からの国家や自治体に対する、要望・陳情合戦を批判しており、不適。

(一)

問9 基本的な読みである。「奥」は「オウ」という音読みもあるので覚えておきたい。「奥義(おうぎ)」、「奥底(おうてい)、おくそこ」、「内奥(ないおう)」、「奥州(おうしゅう)、現在の東北地方」など。

問10 傍線部の前後から「わたし」の心情をはかる手がかりを探す。わたしは最前面の本の後ろにあったものに対して「ぐいと惹きつけられるのを意識しながらのがれられない」つまり魅力を感じて、引越し作業を続けられなくなりましたわけだ。さらに傍線部にある、その「独特の肌ざわり」に関しては、「他の者は決して味あわない」と説明し、さらに「手垢によって黒光りをしている古い家の柱の感触」を比喻の材料として「わたしとの特定かつ独特のかかわりあいというやや淫靡な要素が介在してはじめて成立」す

ると説明している。以上をまとめると、「わたし」はそれらのものに対して、自分にしかわからないような思い出があり、強く懐かしさを感じていると思われる。3が適当。1は「成長した自分」、2は「客観的に」、4は「哀しさと情けなさ」、5は「いぶかしさ(怪しき、疑わしき)」がそれぞれ不適。

問11 傍線部の3行後に「忌々しい、とそれらのことを思うのは」とあり、その後に理由が書かれている。内容を整理すると、「わたし」は紙袋に入っているカードの作成、調査に多大な労力を費やしたが、ある事情によって換金をあきらめ、その仕事が無意味になったため、ということである。十字以内で、となるとなかなか難しいが、要は儲からなかった、ということなのだから「換金をあきらめた」ということになる。

問12 a と b に関しては、予測のつくことについての心象であり、なおかつ「伴っていた」とあることから対比の関係とみてよい。また、c は予測できぬ領域についての感情であり、直後に「それは」と受けて「冬期の風の持つ、重量感ある衝撃」とあることからマイナスの心象であることが判断できる。以上の点を満たす4を選ぶ。

問13 傍線部直前に「現在という壁の層によって封じこめていた」とあることから、「時の緊縛体」とは最前面にあった本の層の、次にあった層のことであると判断できる。その層が「わたし」の目にどう映っているかについては第二段落に「かれらは、新鮮なものを持つまばゆさを既に失っていて、全体にややくすみがちな印象を形づくっているといわねばならなかった。」とある。具体的に、という設問の要求をやや満たさない感はあるが、最も直接的にその層を見た実感が記述されている。

問14 空欄の前後の記述は抽象性が高く難解だが、前に「そのとき」、後に「しかし」と指し語、接続語が並んでいるので、糸口はつかみやすい。指示語の内容をたどると、「わたし」は自分自身の肉体と全き自由な肉体関係に憧れるのだが、不可能であり断念せざるを得ない、という内容。「そのとき」に必要なのが、

d である。そして直後を見ると、逆接で結んだあと「姿見や写真」では役に立たない」とある。「姿見」とは全身を映す鏡である。そのあたりから判断すると、そのままでは自分の肉体と自由な関係を結ぶのは不可能であるので、姿見や写真など、自分の肉体を映すものを代わりに利用して関係を結ぼう、とするのだが役に立たない、というような

文脈になるだろう。したがって「代わりになるもの」を意味する1を選ぶのがよからう。

問15 脱文挿入問題で、なおかつ脱文が接続語と指示語を含むので、これも手がかりはとらえやすい。「しかし」とあるので直前とは逆接関係。「そのようなことが可能であろうか」と続くので、脱文の直前には、「わたし」がその時点でとるべき策(無理を含んでいる)、そして直後にはその策が無理な理由が続く、と推測できる。

問16 内容を吟味する。1、「良い想い出のある品だけ」という旨の記述がなく、不適。3、「どちらを優先しようか迷っている」が不適。荷造りの作業が、そのまま過去の自分との邂逅となっている。4、「荷造りをやめたい」が不適。5、「全力で」が不適。第七段落に「私の脳のなかの本能的な部分はその命令に屈するわけがなかった。」とあるように、「わたし」は全力で荷造りに取り組む、というよりも、本能に逆らえず荷造りに惹きこまれていっていると考えた方がよからう。2が最適。第六段落で二層目のものを剝しながらためらうものを感じている。そのあたりの記述と合致する。